
聖地カトマンドウ： ヒンドゥー教・仏教・民俗信仰の複合

文：石井 溥

写真：大村 次郷

今日の話の眼目

- ネパール、カトマンドゥ盆地の文化・宗教を、
- ヒンドゥー教・仏教・民俗信仰の複合に留意しつつ、
- 歴史的観点を交えて概観し、
- カトマンドゥ盆地がどのような形で「聖地」であるのか、「聖地」となって(されて)きたのかを考える。

「ネパール」と「カトマンドウ」

- 現ネパール(08年～): 連邦民主主義共和国
(人口2649万人(2011年国勢調査))
 - カトマンドウ市: 現在のネパールの首都
[なお、カトマンドウ郡(jilla): 盆地の西北部(1/3)]
 - カトマンドウ盆地＝従来:「ネパール」
[従来＝古代、中世、(今でも時々)]
- ここで扱うのは主にこの盆地



ネパールの代表的言語（民族）分布

I. インド・ヨーロッパ語系

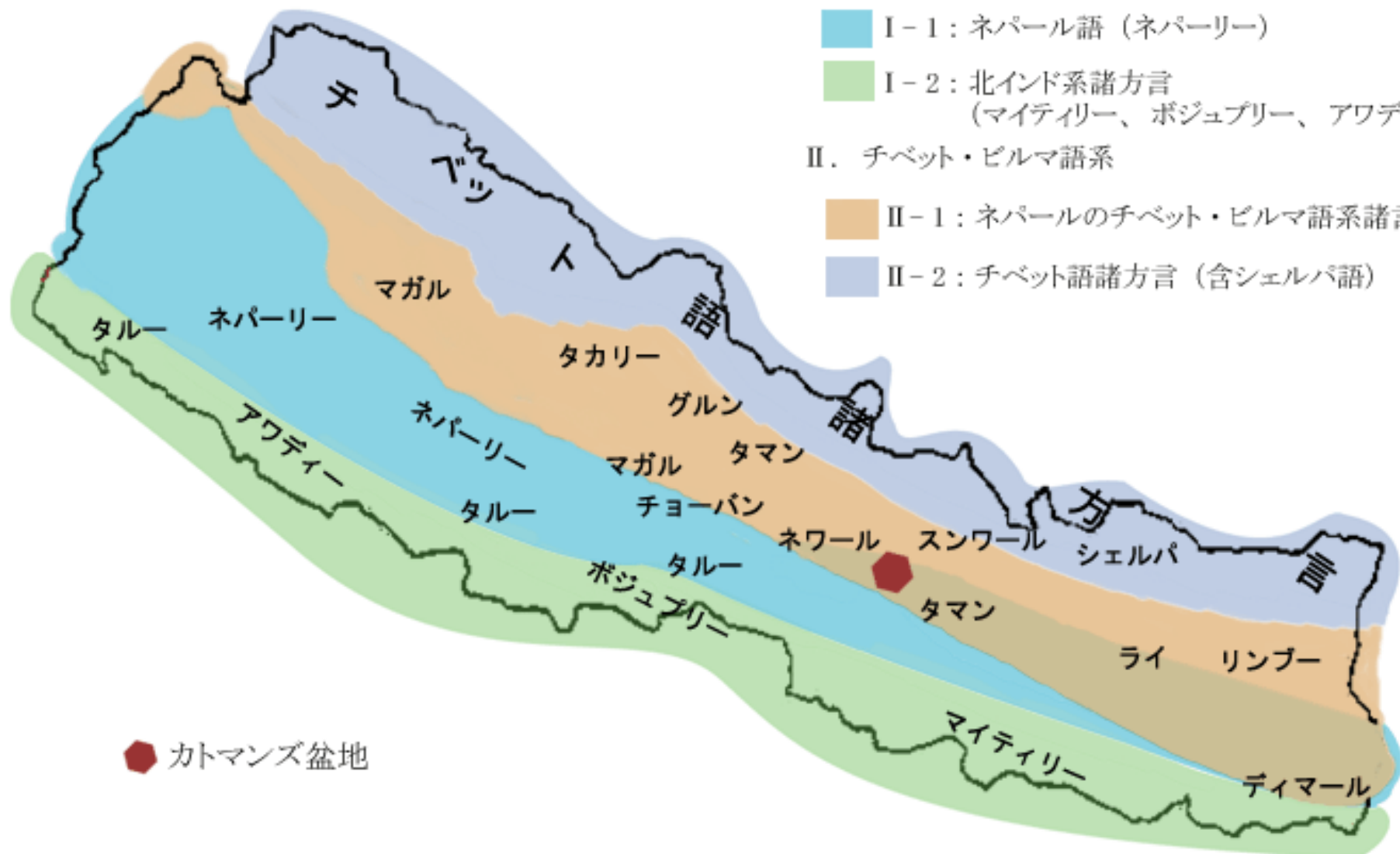
I-1: ネパール語（ネパーリー）

I-2: 北インド系諸方言
（マイティリー、ボジュプリー、アワディー）

II. チベット・ビルマ語系

II-1: ネパールのチベット・ビルマ語系諸言語

II-2: チベット語諸方言（含シェルパ語）



カトマンズ盆地



私（石井）の研究（自己紹介）

- ネワール村落の社会構造・変化の調査（繰返し）
- ネパールの3つのカースト社会の村落調査
（ネワール、山地ヒンドゥー、タライの村） +
上記各村落の変化の追跡、儀礼の調査
- カトマンズのポン教徒（チベット難民）やネワール人（元）チベット交易者の聞き取り調査
- ネパールの近年の社会政治変化と民族間関係
- ネパールとブータンの比較
- ネパール語、ネワール語 テキスト作成 等
- 1972～2006年 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 勤務

ネワール(ネワー)

- カトマンドゥ盆地(標高1300メートル前後)を故地とする民族、人口132万(2011年国勢調査)
- 母語:ネワール語(チベット・ビルマ語系)。母語人口84.7万。カトマンズ盆地に小文明。
- 今日に残るKTM盆地の文化の主な担い手
- 18世紀の山地ヒンドゥーの征服・ネパール統一以前は、ネワールは「ネパール」の主人公
- それ以降は「被征服民族」だが、官僚、商人等有力者も(工芸、農業等も。識字率高)
- 数十の(仏教徒を含む)カーストが存在

「聖」、「聖地」

- 「聖」: 並外れた(超自然的)力、清浄さ、完結性
[また、その対極]
(宗教性)
- 「聖地」= 聖なるものの顕現する(と考えられている)場所:
- (具体的には)寺院や祠など(を含む一定の範囲)
- 本発表では、山や川・湖、集落、居住地等との関係も念頭におきたい。

カトマンドゥ盆地を「聖地」としている主要要素

- 多くの神仏・寺院・祠などの存在（神々の住まい）：
「カトマンドゥ盆地に聖地・聖なる存在がある」
- 神格の配置・構造化などによる「聖化」
「カトマンドゥ盆地は聖地である」

[地形的要素の（「土着化」への）利用]

- 多数の祭礼・儀礼：年中行事、人生儀礼、随時儀礼（詳細は今日は割愛）「聖地に生きる」

[聖地であること・聖性の再確認も]

以下主に試みること

- 歴史をたどってカトマンドゥ盆地の「聖化」の過程を探る。

【主に利用する資料】

- リッチャヴィ時代の碑文集成(和訳あり)
- マッラ時代の王朝譜(vamśāvalī)(英訳あり)
- 中世ネパールで作られたプラーナなど
(英訳や研究があるものを利用)(17-8世紀のthyāsahuは使わず)
- 後代(19世紀)の王朝譜(複数の種類、写本多し、ネパール語で書かれている。英訳があるものも。)
- 近年の研究書の一部

ネパールの歴史：時代区分

- 【古代】4-5～9世紀末、**リッチャヴィ王朝**、インドに範。ヒンドゥー教、仏教、四姓。
【中世】9世紀末～1769年。中世前期＝移行期、中世中期＝**マッラ王朝**前期(1200～15世紀末)、中世後期＝3都分裂時代(15世紀末～1769年)。**ネワール文化**
- 【近世・近代】1769年**シャハ王朝**(ほぼ現在の国のサイズに)。**ネパール語**
- 【現在(08年～)】連邦民主主義共和国

古代リッチャヴィ時代概況

- 史料：200余の碑文（サンスクリット語）。7世紀：新旧唐書、大唐西域記等にネパールの記述。
- インド文明の要素が圧倒的（支配層、碑文の言語、暦など） ヒンドゥー的要素も仏教的要素もインドから直接流入（インド文化圏内）
- 一方、土着の要素が存在（碑文に非サンスクリット的な地名・官署名など）
- 7世紀からはチベットとの関係も（一時はチベットに服属）
- 神仏像：碑文以前から。2世紀のヴィシュヌ像、諸母神像など、インドの様式 ➡ リッチャヴィ様式（整）

古代(1): マーナ・デーヴァ王碑文

- 王に関連した碑文(布告、事績、王統など)には初期はヴィシュヌ神、中後期はシヴァ神の讃が多い。例: **チャング・ナラヤン寺院のマーナ・デーヴァ王の碑文**(西暦換算464年の銘)。
 - マーナ・デーヴァ王による東西の平定などを記す(サンスクリット語)。
 - 「ドーラー山(dolādrī)[チャング]に住み、神々の礼拝供養を受けるハリ神(hari)[ヴィシュヌ神]は、何にも増して偉大である。」(佐伯訳)
- ➡ **山の聖性、インド的神格への讃、その土着**

カトマンズ盆地



古代(2): ジャヤ・デーヴァ王碑文

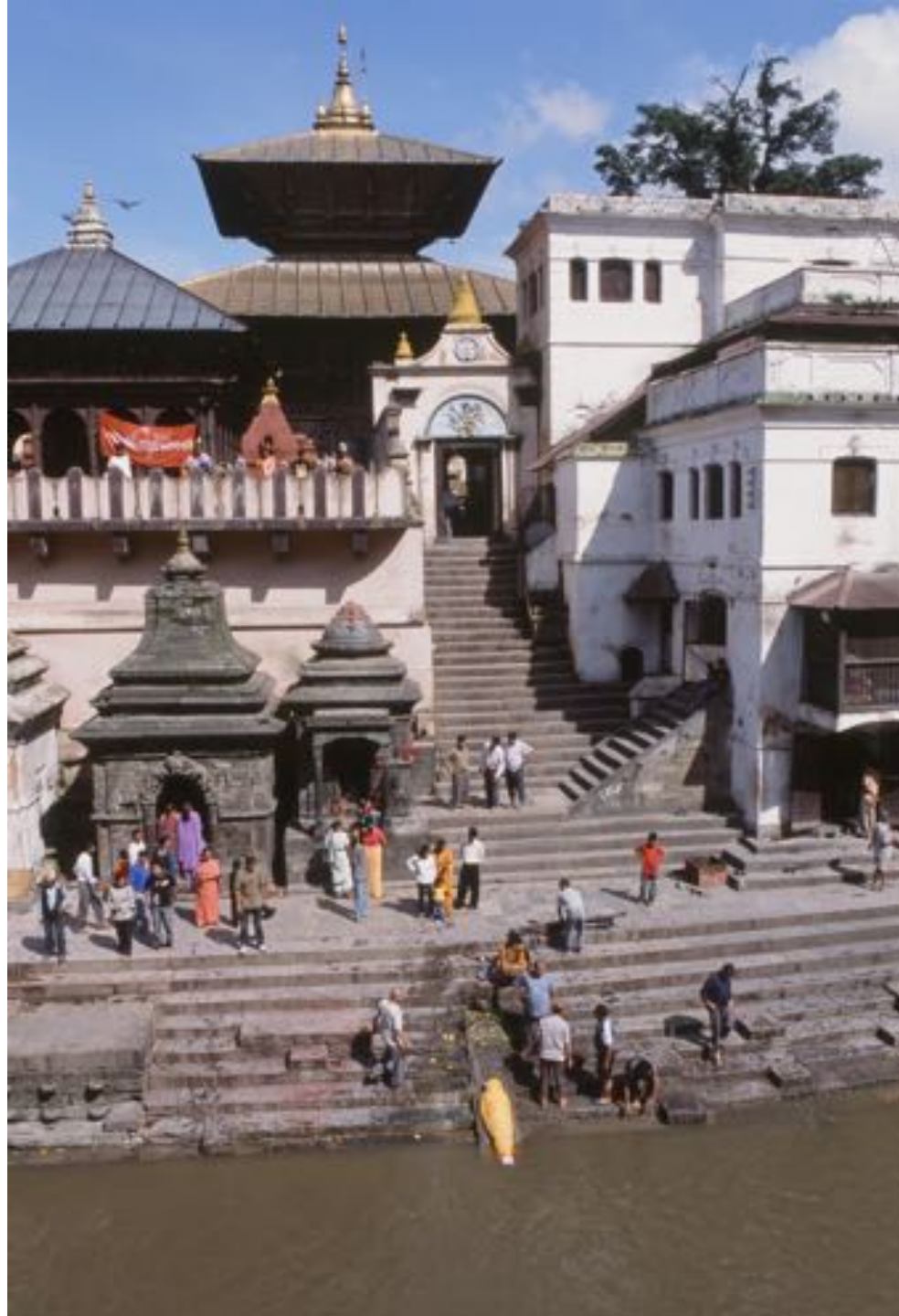
- パシュパティ所在のジャヤ・デーヴァ王の碑文(西暦換算733年の銘): リッチャヴィ王統を記す。
- 多くの神名: パシュパティ神・シヴァ神の様々な異名、ヴィシュヌ神(その異名)、ブラフマー、ラクシュミー。
- 「黄金からなるメール山(meru)が聳える如く、神[パシュパティ神]の憩いの地たるこの聖壇 [パシュパティ聖域=ネパール盆地]は、雪を頂く七山域(kulācala) [非常に大きな山]に四方を囲まれたるこそふさわしけれ。」(バジラーチャリヤ [佐伯訳] 1999: 762)
- ネパール盆地や山(須弥山、ヒマラヤ?)の聖性がみてとれる。パシュパティ(=シヴァ)の卓越性、古さ。
- 同王の他の布告文には「ネーパーラ・マンダラ」の語も、佐伯訳では「ネーパール・マンダラ」(同上 762)

古代の宗教状況と聖地

- 神仏への土地の寄進。ゴーシュティー（寄進地管理・儀礼執行組織、後世のグティ）、碑文：6世紀。
- 仏教的な碑文は（ヒンドゥーと重なるものを含め）2割程度、法華経などを踏まえた大乘の諸尊格（阿弥陀、釈迦、阿閼、世自在、蓮花手、普賢、文殊、勢至など）、複数の僧房（ヴィハーラ）、仏像、石の小仏塔、布施（施主は王、有力者、出家僧、尼僧）。王は仏教も保護。
- 宗教的複合も：ナーラーヤナ神への特別礼拝の残金でパシュパティ・ナート寺院に宝傘奉納
- 盆地そのものの聖性：山に囲まれた聖壇（vedī）と表現。4方への神の配置も。同時代史料にはないが有力仮説。（インド的聖地観念の影響：「チャール・ダム」4聖地）

パシュパティ ・ナート寺院 (バグマティ川沿い) 現在の本堂は17世紀末

(撮影: 大村次郷)



パシュパティ ・ナート寺院正 面

(撮影: 大村次郷)



パシュパティ のシヴァ・リン ガと行者

(撮影：大村次郷)



チャング・ナラヤン寺院：大地震 後（撮影：大村次郷）



ナラシンハ(ヌリシンハ)像:
チャング・
ナラヤン寺
院境内: 大
地震後

(撮影: 大村次郷)



中世前期 (移行期: 9世紀末～12世紀)

- 史料の極少期: 宗教文書の**写本** (諸種の経、密教聖典、仏伝文学、プラーナ、儀礼テキストなど。古くは9世紀末。**10-11世紀からは多数**)。中世文化形成上重要な時期。
- **イスラム教徒のインドへの侵入の影響** (10世紀頃から): 南からネパールへ人口流入加速。1203年、ヴィクラマシラー寺院破壊、インド仏教滅ぶ。**ネパールの仏教は思想の大供給源を失う。「土着化」の進行。独自性が強まる。**
- **密教化により仏教とヒンドゥー教が接近**。密教の諸尊、女神がポピュラーに。観音信仰も広がる。**儀礼化**の進行。祭礼も。(ヴァジュラヤーナ、シャクティ、タントラ)
- **政治的支配層が弱体化し、聖職者への庇護が減少 → 聖職者と民衆の相互依存**

中世中後期(宗教を中心に)

- 史料: **王統記**(14世紀)、折本(17-8c世紀)。ステイティ・マツラ、ヤクシャ・マツラの時代(14-5世紀)にピーク。王教は**パシュパティ信仰**(仏教に私的に帰依した王も)。
- **出家僧団衰退、仏教僧の妻帯、仏教徒のカースト化**(16世紀前後?)(妻帯僧の住居としての「僧院(バハー、バヒ)」増加)
- **儀礼の複雑化・体系化の進展。民衆への浸透。**
- 後期には、カトマンドウ、パタン(ラリトプル)、バクタプルの**3つの都市を中心とする小王国に分かれ政治的に対抗。寺院・王宮などの建築・装飾も競う** → 今日に残る建築群 (8母神による守護)
- 神仏像: リッチャヴィ様式に加え**中世ネパール様式(複雑、装飾的)**(合体神も)。

ゴーパール譜にみる中世の前・中期

- ゴーパール(王統)譜 (Gopālarāja~~vaṃśāvalī~~) : 14世紀、スティティ・マツラ王時代に書かれる。~~記録性・信憑性高い~~。中世については貴重な同時代史料・現実的記述。
- (現存する)最初の数葉(など)に神話的・宗教的な記述も。前半部には昔(伝承上)の王朝・王の記述。
- 神格:~~パシュパティへの言及~~多し。加えて:スヴァヤンブー、ブグマ・ローケーシュヴァラ、カサウ仏塔、水に横たわるヴィシュヌなど。
- ~~西ネパールのカサ王によるパシュパティ、スヴァヤンブー、ブグマ・ローケーシュヴァラ参拝~~(遠くまで有名)
- 「ネーパール・マンダラ」の表現:宗教的意味合い希薄。
- ~~現在もあるいくつかの祭、儀礼への言及~~(中世前期から?)
- ~~地理的配置による聖化への若干の言及~~(聖空間の構造化)

中世:「ネーパーラ・マーハートミヤ」

- 「ネパール」の偉大さ・高貴・聖性」、9世紀? 13世紀? ...
- ネパールで書かれたシヴァ神中心の神話(サンスクリット語)
- 第1章パシュパティの起源: シヴァ神とパールヴァティー女神はカーシー(バナーラス)とカイラーサを去ってネパールのヴァグマティー川のほとりの花咲く森にきて大変に満足し鹿の姿になり「パシュパティ(獣の主)」と呼ばれた。グヘーシュヴァリー女神の聖所(ピータ)の起源も。
【土着化】
- 第10章: 山の姿をした魔神がカトマンドゥ盆地の水流を堰き止めたが、クリシュナが魔神(亀の魔神)の体を切って盆地の水を外に流した。【後述のスヴァヤンブー・プレーナとの類似と相違】(別にブッダへの言及も)
- インド的ヒンドゥー的要素の「土着化」「ネパール化」、盆

ブンガ・デヨー

- **ブンガ(マティ)村辺り**で古くから崇拝されていた**雨の神**。
- リッチャヴィ時代から崇拝されていた**観音**と習合。その時期は、おそらく中世前期。「ブグマ・ローケーシュヴァラ(世自在)」「アヴァローキテーシュヴァラ(観自在)」「カルナーマヤ(大悲観自在)」。王権の庇護。
- そのしばらく後、**マツェンドラ・ナータ**と習合(15世紀?)、不空罽索観音とも。現在、ラト・マチェンドラ・ナートとも。
- **民俗信仰、仏教、ヒンドゥー教の複合の典型**(シヴァ、クリシュナと言われることも)
- **盆地で最もポピュラーな神格**、いろいろな集落と関係、1か月に1回礼拝に行くグティ(儀礼執行組織)が村々に。
- **王権との関係も深い: 多くの寄進地。グティ。山車巡行が滞ると王と国に良くないことが起こる。**

ブンガ・デヨー(ラト・マチェンドラナート)寺院 16世紀 (撮影:大村次郷)



ブンガ・デョー(ラト・マチェンドラナート) 寺院 地震で壊滅 (撮影:大村次郷)



パタンの町に行くブンガ・デヨー(ラト・マチ ェンドラナート)の山車 (撮影: 大村次郷)



ブンガ・デョー ー(ラト・マチ ェンドラナート)像:

(撮影:大村次郷)



スヴァヤンブー(スワヤンブー)

- ネパール仏教の大尊格(密教的)
- 本初仏(アーディ・ブッダ)、金剛界五仏を統括(持金剛等)
- カトマンドゥ市の西はずれの丘の上に大仏塔(11-14c.?)
- (半球形の)仏塔は古い部分が新しいものによって繰り返し塗り込められているといわれ、起源は不明。
- ゴーパーラ譜にはマーナデーヴァ王の父ヴィシュヴァデーヴァ王が作ったとある。この王を碑文にあるマーナデーヴァ王の曾祖父ヴリシャデーヴァ王と解す研究者は多いが、同王統譜作成の1000年も前のことであり、確実な証拠ではない。とはいえ、
- (大乘の仏として)古代に丘の上に祀られた？

スワヤンブ ーナート寺院

(撮影: 大村次郷)



中世後期：スヴァヤンブー・プラーナ

- 中世後期になるにつれ、インドの宗教文献にならいつつ、「土着化」の想像力が強く発揮される文献があらわれ、またそれを受けた聖所が作られ、また整備、改変される。

【代表：スヴァヤンブー・プラーナ（15-6世紀）】

- ネパール盆地は山々と森に囲まれた湖で蛇王の住まい
- 過去仏（①ヴィパシュヴィー如来、②シキー如来、③ヴシュヴァブー如来等）の盆地訪問
- ①蓮を植えスヴァヤンブー仏誕生の予言、②スヴァヤンブーが光として現れた、③文殊菩薩が（大）中国からきてスヴァヤンブーを礼拝し（礼拝の便宜のために）剣で丘を切り開き湖の水を流し出した（蛇王の引き止めも）。

カトマンズ盆地





土着化、融合の例：ナマラ(ナモーフツダ)：
マハ・サット(マハー・サトヴァ)の伝説(パナウ
ティの王子の捨身飼虎)の場 (撮影：大村
孝郷)



中世後期：具体的聖空間構築の進展

- 文献上などの**観念と現実の空間配置の一致**の方向：現在に残る建築など。

盆地：様々な神格の配置。**4方**（盆地の周りの4つの山に祠、ナーラーヤナ（ナラヤン）、観音、ガネーシャ（ガネシュ）、ヴァラーヒー（バラヒ）、ビーマセーナ（ビンセン）・・・）

王宮：守護神タレジュ（＝ドウルガー）女神。**物理的高低**

寺院：中尊＝**単一中心**＋**8母神**（が囲む聖空間）等

集落：中心の寺院。**双分構造**。**結界**。**8母神**[×3...

- 大きなネワールの集落には双分構造（カトマンドウ、バクタプル、テチヨ村）。2つの地区それぞれに中心。

完結した「世界」「宇宙」の構築。

カトマンドウ
の王宮前広
場のシヴァ寺
院
(マージュ・デーガ)
(17世紀末)

(撮影：大村次郷)



土宮前広場のシワア寺院とウイン ユヌ寺院跡：大地震後

（撮影：大村

ハルカ



王宮前広場の寺院群：大地震後 (撮影：大村次郷)



(シヴァ神の息子
)ガネシュ(ガ
ネーシャ)神
の祠(於カトマ
ンドウ)

(撮影:大村次郷)



近世ネパール：政治宗教状況の大変化

- 1769年：シャハ王朝による盆地征服。今の大きさの国に。
- 軍事的征服：軍隊、官僚維持の必要。王族・貴族の奢侈。
- 寺院などを維持した土地が軍人・官僚、王族・貴族に
→ 多くの寺院の衰退（特定の寺院・祭礼への支出）
- 文化：ヒンドゥー教、ネパール語、軍事的、印・欧の影響
- 王はヴィシュヌの化身、パシュパティで火葬。
- 被征服者ネワールを意識：ネワールの言語・文化を抑圧。
- 一方、被征服者側の祭り、聖所、神格も利用：伝統的大寺院のグティ温存。インドラ・ジャトラで王がクマリを礼拝。マチェンドラ・ナート祭の儀礼に参加。村落部も含め、地域の大祭での政府のための儀礼（サルカール・プジャ）補助。（被征服者の反発を和らげる）

聖地に関わる近世の史料: 王統譜

- Vaṃśāvalī 「(王朝)王統譜」(「～譜」と略)
- ヴァンシャーヴァリー(サンスクリットの転写方式)
→ バンサバリ(現代ネパール語の発音に近い表記)
- 19世紀頃に書かれた複数の種類のバンサバリがかなり多数流通。
- 神話からラナ時代(19世紀)まで。
- 聖地の観念的構築の傾向も(実際の建築や造像を伴わない場合も)。

「ライト譜」: Wright 1877

- 仏教系の王統譜。
- 開闢神話部分は、スヴァヤンブー・プラナを踏まえているが短縮。諸名称や話の流れは改変。
- 盆地は須弥山やヒマラヤと関連づけられ聖性が強調される。

パドマギリ (Padmagiri) 譜 : Hasrat 1970

- 開闢神話部分には仏教系とヒンドゥー教系の両方のバージョンが含まれ、相互に異なっている（仏教系はスヴァヤンブー・プラーナ、ヒンドゥー教系はネーパーラ・マーハートミヤを踏まえているが、かなりの改変。
- ヒンドゥー教系では様々な神格を4つの名前と姿で示すこだわりが強く、また、9ドウルガーや64のシヴァ神など、数によるセットが強調される。
- ゴダーヴァリー河がデッカンを去って盆地にきたなど「土着化」の記述も顕著。

その他:【セン(セーナ)譜、タパ譜・・・】

バサ (バーシャー) 譜 : Paudel 2020 v.s. (1963)

- ・ヒンドゥー教系王統譜。ネパール語。作者不明、19世紀？
- ・神話・伝説が多い。歴史部分にも神話・伝説が紛れこむ。
- ・冒頭は(盆地開闢神話でなく)宇宙生成論:「創造は不可視(avyakta)から。可視のものは滅び。それを免れたブラフマが真正」・・・光、水、大地の生成。そこにブラフマー、ヴィシュヌ、マヘーシュヴァラ(シヴァ)が創造、維持、破壊の神として存在。大地にスメル山(サイズへの言及)。
- ・次に14世界、7つの大陸、7つの海。
- ・聖地ヴァーラナシー。パシュパティはそれより4倍優れる。
- ・グヘーシュヴァリのピータ。多くの聖地の生成譚。
- ・64のシヴァ・リンガ、232の副リンガ等(数へのこだわり)。

バンサバリからみる近世の聖地

- 王統譜等による聖地としての盆地の捉え方：
仏教バージョンとヒンドゥー教バージョンの間
だけでなく、仏教バージョン同士、ヒンドゥー
教バージョン同士間に差異 → **聖化の観念の
輻輳**（数・方位。人体、仏塔、剣、壺、太鼓
、ほら貝）
- 数へのこだわり。すべてが実在の聖地に裏付
けられているわけではない。（インドの影響）
- インドの古典・聖地を意識。「土着化」の継続。
- **観念的構築**の側面

古代～近世の(聖地の)変化(まとめ)

- 古代: 宗教的並存・複合は既に存在。盆地自体を聖地とする觀念存在。聖地構築度は(中世後半に比べ)限定的。インド文化圏の周辺の一員。エリート文化 [Skt] 残る。
- 中世: 聖化の觀念と具体的な寺院建築・造像などが平行進展。相互フィードバック。密教化進行。祭礼・儀礼の増加 【中世後半】: 位置・配置などによる盆地(等)の聖化の強化。「土着化」の進行。それらを支える政治権力とその間の競争。(ネワール文化繁栄。独自性。大衆化)
- 近世: シャハ王朝による征服。権力による支持は限定・選択的。被支配者文化抑圧の一方、保護・利用も。多くの寺院・聖地の衰退。觀念的構築の進行。聖化の觀

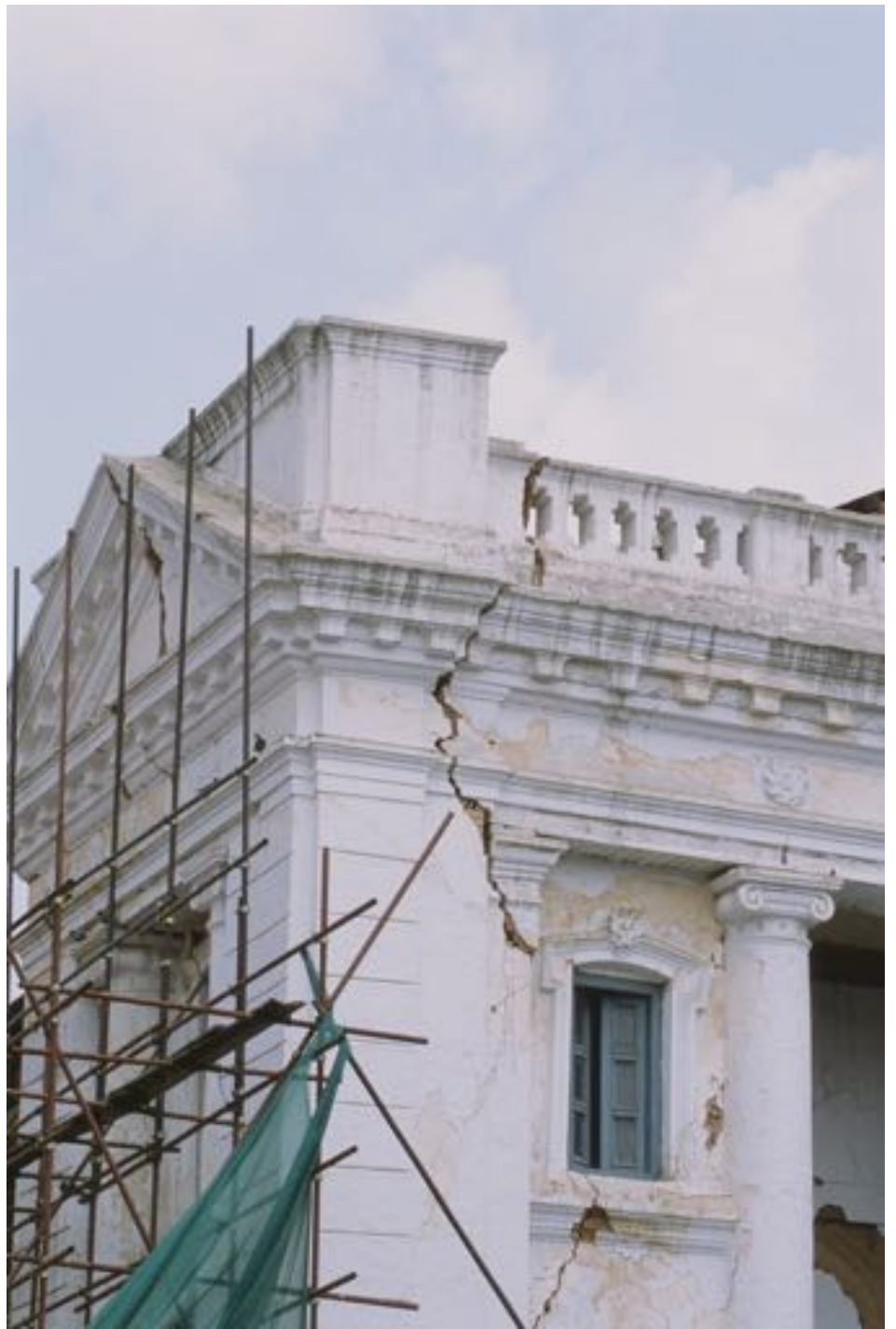
カトマンドウ王宮
(ハヌマン・ド
カ王宮)バサン
タプル・バワン
(1769年、プリトビ
・ナラヤン王)

(撮影: 大村次郷)



カトマンドウ
王宮（ハヌ
マン・ドカ
王宮）の
洋式建築部分
（震災後の修復）

（撮影：大村次郷）



カトマンドゥ王宮大震災後（撮影：大村次郷）



セト・バイラ
ブ(スヴェ
ータ・バイラ
ヴァ)像(於ハ
ヌマン・ドカ王宮。
1795年に王がイ
ンドラ神に奉獻)

(撮影:大村次郷)



バグマティ川
沿いのカル
モチャン寺院
の主神ヴィシュ
ヌ

(19世紀後半)

(撮影：大村次郷)



カルモチャン寺院震災後（撮影：大村次郷）



近代化の中で

- 政府や人々の支持のある聖地は存続：パシュパティ、チャング・ナラヤン、スワヤンブー、ラト・マチェンドラ・ナートなど伝統ある大寺院の出費はグティ・サンスタン（グティ公団）が行う（行政の管轄下）
- 経済力をもつ地域の特定寺院などの整備（衰退するものも）。祭礼への執着（共産党系政権下でも）、無関心
- 近年の政治社会変化：宗教（施設）の多様化：チベット仏教寺院、上座部仏教寺院、キリスト教会など増加
- 観光地化：カトマンドウ、パタン、特にバクタプル（研究、観光地化、世界遺産、保存）。チャンパデビなど盆地周辺の山まで商業的ハイキング（day hiking）の対象に。

上座部仏教寺院 (於キルティプル)

(撮影: 大村次郷)



ボードナート：大地震後（撮影：大村次郷）



カトマンドウのポン教寺院(撮影:石井 溥)



村の調査からみた「聖地」(1)

(誰にとっての聖地か、村の人々にとっての聖地は？)

- 上記(など)の**伝統ある大寺院は崇拝対象**。
- 中でも**ブンガ・デョー**(ラト・マチェンドラ・ナート)は、月一度のブンガ・デョー参拝のための(サンルー)グティ(儀礼執行組織)が村に複数ある(ただそれも衰退)。
- 盆地全体を聖地とする観念には無関心
- **インドのカーシー(ベナレス)、バドリナートなども経**済力・宗教心のある村人の巡礼対象(帰ると大宴会)
- **調査村(カトマンドゥ市西郊)の人々にとって一番大切なのは住んでいる村の主神**(調査村では「ビシュヌデビ」、それとともにバグワン・ブッダも。):神仏両方。

村の調査からみた「聖地」(2)

- 女神「ビシュヌデビ」は村内に寺があるが、その母とされる同名の女神が村域外の聖地(川の合流点)にあり、大祭の際にミコシがそこに運ばれ儀礼。
もとは自然石の女神(この村では聞かれないがカトマンドゥ盆地では「アジマ」と呼ばれることが多い。
土着の母神?)。集落の内外は儀礼的に峻別されるが、村外の聖所(ネワール語で「ピーガン」、ネパール語では「ピート」「ピータ」)にあり村の主神と重なるこの神格は、より力のあるものとされる。
- 自然石の神としては、ネワールの父系集団の神であるディグ・デョーが村内に複数ある。ディグ・デョーはネワール社会では一般的。

村の調査からみた「聖地」(3)

- ネワールの人々の生活は儀礼に満ち、様々な空間は聖なる存在と関係(特にシャハ王朝側の山地ヒンドゥーの人々に比べ)。
- 集落ごとの相違: 他の村、集落では他の神仏が主神として祀られる。
- 儀礼も近年ではある程度衰退の傾向がみられる。宗教心を儀礼への参加であらわす人々は今でも多いが、無関心を表明する人もまたみられるようになっている(ネパールは現在「世俗的国家」)。

S村中央部 1996年 (撮影:石井 溥)



S村での田植え
盆地の南西縁の
山(チャンパデビ
[Np], ディナチョー[N
w])を背景に

(撮影: 石井 溥)



ビシュヌデビ女神と脇侍（撮影：石井 溥）



川辺の聖所でのビシュヌデビ女神への供犠

(撮影: 石井 溥)



父系親族の 神ディグデヨー

(撮影: 石井 溥)



結語（１）

- カトマンドゥ盆地：聖化の様々な観念と建築・造像・儀礼等の具体的諸行為が**歴史的に堆積**。
- ひとつの観念で強力にまとめるのではなく、諸宗教、諸宗派、**諸観念が並存、複合、輻輳**。
- **インド的要素の卓越**（その中にヒンドゥー教、仏教など様々な要素。数による配置も。）
- チベットの影響も歴史的状況に応じて受ける。現在は目立つ時期（1959年以来のチベット難民）
- **諸宗教の相互排除の少なさ**（近現代の「ヒンドゥー国家」の下、および現在では？）。

結語(2)

- インド的要素の「土着化」「ネパール化」によるカトマンドゥ盆地の聖化：聖なるものの建造、造像。聖なるものとしての盆地の構築。
- 独自性。変化。
- 民俗信仰的要素の見え隠れ：「基層文化」？
：石、母神、双分構造、他（人が神になる、祖先崇拜・・・）
- 民俗信仰的要素の変化をたどることや「基層文化」の要素をつきとめることの難しさ

結語(3)

【聖地の観念の輻輳との関連で:】

カトマンドゥ盆地は聖なるものや聖所を擁するとともに、盆地自体が様々な形で聖地とされてきた。そのどのレベルを聖なるものと受けとめるかは、宗教の相違だけでなく、社会的地位、知識のあり方や、どこに住んでいるか等をも含め、グループや人の立場によって異なる。

参考文献(抄)

- 石井 溥・大村次郷 2003『ヒマラヤの「正倉院」:カトマンズ盆地の今』, 山川出版社.
- 石井 溥 2006「カトマンズ盆地村落における『ビシュヌデビ』女神とその祭祀」, 立川武蔵(編),『ヒマラーヤ地域における仏教タントリズムの基層に関する研究』, pp.1-22 [科研基盤B報告書].
- 石井 溥 2010「ネパールの宗教と社会」, 奈良康明、下田正弘(編),『仏教出現の背景』(新アジア仏教史 01), pp. 331-65, 佼成出版社.
- 佐伯和彦 2003『ネパール全史』, 明石書店.
- 立川武蔵 1990『女神たちのインド』, セリカ書房.
- 田中公明・吉崎一美 1998『ネパール仏教』, 春秋社.
- バジラーチャリヤ, D. (佐伯和彦訳) 1999『古代ネパール史料:リッチャヴィ時代の銘文集成』, 明石書店.
- 中村元・増谷文雄(監修) 1982『仏教説話体系 14 伝説と民話(1)』すずき出版.
- Acharya, J. 1992. *The Nepāla Māhātmya of the Skandapurāna: Legends on the Sacred Places and Deities of Nepal*. New Delhi: Nirla Publications.
- Bajracharya, M.B. and W. Smith 1978. *Mythological History of the Nepal Valley from Svayambhu Purana*. Kathmandu: Avalok Publishers.
- Gutschow, N. 1982. *Stadtraum und Ritual der Newarischen Städte im Kathmandu-Tal*. Stuttgart: Verlag W. Kohlhammer.
- Hasrat, B.J. 1970. *History of Nepal: As Told by its Own and Contemporary Chronicles*. Hoshiarpuri: The Author.
- Locke, J. 1980. *Karunamaya: The Cult of Avalokitesvara-Matsyendranath in the Valley of Nepal*. Kathmandu, Sahayogi Prakashan.
- Owens, B. 1989. *The Politics of Divinity in the Kathmandu Valley*. [PhD Dissertation. Columbia Univ.]
- Paudel, N. 2020 v.s. (1963). *Bhāṣā Vamśāvalī*. Kathmandu: Purātatva Vibhāg, Nepāl Rāṣṭriya Pustakālaya.
- Roerich, G. 1959. *Biography of Dharmasvāmin*. Patna: K.P. Jayaswal Research Institute.
- Slusser, M. 1982. *Nepal Mandala: A Cultural Study of the Kathmandu Valley*. Princeton: Princeton University Press.
- Tuladhar-Douglas, W. 2006. *Remaking Buddhism for Medieval Nepal : The fifteenth-century reformation of Newar Buddhism*. Abingdon: Routledge.
- Vajrācārya, D. and K.P. Malla 1985. *The Gopālarājavamśāvalī*. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.
- Wright, D. 1972 (1877) . *History of Nepal*. Kathmandu: Antiquated Book Publishers.